

浄土

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (特別授承認雑誌) 第三二五号
昭和四十九年五月二十五日印刷 昭和四十九年六月一日発行

第四十卷

第六号



1974
6

新連載

—快調なスタート—

念仏ひじり 三国志 寺内大吉

佛心者
大慈悲也

良智



みほとけのことば

佐藤良智

(大正大学名譽教授)

このことばは「永遠のいのちをみる經」(觀經)のなかにかかれています。あみだ仏のみこころは、一体どのようなものかと言え、ずばり一言で、大慈悲であるということです。これほど明快に説かれる經も珍らしい。今のことばで言えは愛であります。仏教では愛ということばは、愛欲などと言われるように、個人的な本能的なものであります。ですから、あまりいい意味では用いません。慈悲とは大きくておしみのことばであります。古今東西人間のこころの底にひそむものであります。仏典に「心・仏・及衆生は無差別」ということが説かれています。仏のこころは、即ちわれわれ衆生の心に秘わります。愛より深い慈悲の心は、いつもいきいきと我等の心に通ずるものです。仏の慈悲を頂き、人を救い、人類より争いをなくし、平和をもちたすものこそ、わたしたちの永遠の願いであります。仏の永遠の願いであります。

六 月 号



目

次

みほとけのことば……………佐藤良智

特集 私のすきな史跡散歩

浅草三つの史跡……………一瀬直行…(2)

阿弥陀峯とその周辺……………賀幡亮俊…(5)

別府近郊一日出・杵築の寺を訪ねて……………丹羽演誠…(8)

特集 生活の中に生きる仏教……………12

— 一蓮托生・縁起・以心伝心・愚痴・対機説法

四苦八苦・往生・自業自得・馳走・方便 —

法然上人霊場めぐり⑤……………村上博了…23

— 第五番札所 勝尾寺二階堂・第六番札所 天王寺念仏堂

第七番札所 一心寺 —

選集講話⑮ 諸仏はただ念仏のみ証誠す……………佐藤良純…28

経典に聞くシリーズ④ 仏説無量寿経巻上……………村瀬秀雄…31

念仏ひじり三国志① 法然上人をめぐる人々……………寺内大吉…36

浄土宗の宝物 徳川家康の増上寺本堂造営年次考……………宇高良哲…47

表紙 久住 静雄画



特集 私のすきな史跡散歩

浅草三つの史跡

一瀬 直行

待乳山聖天

待乳山聖天の周囲の町並は廢物關係の商売によってしめられている。靴製造業、皮屋、それに関連した卸業が目立つ。かつては花川戸から今戸にかけて両側には、下駄草履、鼻緒類の問屋が軒をつらねていた。

待乳山聖天は一段と小高い所にまつてある。下町一帯が焦土と化した時、見るかげもないお堂あとや境内の立木が、荒涼たる焼け跡の中のどこの町角からでも眺められた。境内の焼けただれた大木の幹や太い枝が一せいに北を向いて垂れさがり、当時の烈風と猛火のすさまじさを忍ばせていた。今日では境内もすっかり整備され、お堂もみごとに完成され、周囲の樹木も茂っている。

台東区役所編「上野浅草名所案内」には、「浅草聖天町にあり。待乳山聖天を祀る。待乳山は隅田川にのぞんだ往古の丘陵地帯の名残りで、古来よりの名所である」と、紹介されている。

又、「江戸名所図絵」に「浅草の待乳山」は新勅撰に入りける弁基法師の歌

まつち山夕越え来ればいほさきの

隅田川原に独かもねん

とよめる旧跡とかや今待乳山と題する碑あり。戸田恭光入道茂睡とて寛文の頃の歌よみの立てし也。其の歌に、

哀れとは夕越えて行く人も見よ

まつちの山にのこす言の葉

江戸砂子

とあり、この由来にも種々の異説があるらしい。

石段をあがってゆくと、正面にお堂がたって、東側の隅田川の見おろせる所に戸田茂睡の歌碑がたっている。戸田茂睡は江戸時代初期の歌人とかいわれている。

お堂の周囲をまわって、願いごとのかなうようと、お百度をふんでいる。主に花柳界や料亭あたりの女が多い。髪を乱し、ひやめし草履に素足で熱心に祈っていた。花柳界や兜町あたりに信者が多い。運の神さまと云われている。信者の

あげた二た又大根が神前に供えられている。

茂睡の歌碑の側に立てば視野がひらけ、眼下に隅田川が流れ、向岸の人家が眺められた。かつてはここ今戸岸から渡し舟が出ていた。静かな川面をすべって、小舟が段々遠ざかっていく。今日のように川の流れが汚れてはいなく、周囲の風情と共に豊かな情緒があった。

昨年小高い聖天さまから名月を見たさに来てみたが、人っ子一人見当たらない。もはや名月のさえざえした美しさにひかれる人は、いなくなったのかもしれない。

淡 島 堂

淡島さまの入口の横に六地藏がまつてある。赤い幟が観音堂の境内を吹き抜ける風にはためいている。昨日まで黒ずんで汚れていたのが、今日はお地藏さまの涎掛けが赤い色の新しいものになっていった。信者の誰かが自分の手でつくり、取替えていったのであろう。

小さな石橋を渡れば、つつましいお堂がたっている。戦災の時猛火からのがれた建物の一つである。そのために一段と古めかしく、年輪を思わせる。

周囲は小さな池によってかこまれ、水面の藻が青く染めて

いる。ふちの石には小さな亀が甲らをほし、時たま水音をたてて沈んでいく。それも今日では、池の水がかわき、わずかにお堂の横に水溜りのように名残りをとどめている。お堂の周囲には立ち木が戦前そのままに上げている。

堂内は狭く、暗い。低い天井からは、糸を通した折鶴がいくつも垂れさがっている。既に色はさめ、煤けている。

ここでは年中行事の一つとして、毎年針供養が催される。当日は晴着姿の娘さん達が、連れそって参詣し、時ならぬはなやかさを振撒く。

今日では観音堂も五重塔もみごとに完成して、豪華できらびやかな容姿をほこっている。その中であって淡島さまは、取残されたように古色蒼然としている。却ってそのため雅趣豊かに奥ゆかしい。

一葉記念会館

一葉記念会館は区の管理のもとにあり、ゆかりの地竜泉寺町の一角にたっている。周辺の町は、一葉の文学にふさわしく、小さな商家や町工場がたち並び、人家が密集している。道は吉原の横手に通じ、三の輪方面にも通じている。

会館の前に小さな公園があり、狭い所にブランコとか、滑

り台とか、砂場が設けられ、近所の子供達が楽しそうに遊びまわっている。ここなら車の危険はない。尚公園の北側には、一葉の「たけくらべ」の記念碑がたっている。

二階建の一葉記念会館は、階下が集会所にも使え、二階は一葉の生前をしのぶ色々な遺品が展示されている。たとえば自筆の「たけくらべ」、草稿、書簡、机、硯箱等、その他衣類や写真が展示され、日常生活を知る縁ともなる。そして旧居茶屋町の模型があつて、当時の町並の様子が、ひと目でわかるようになっていく。

一葉の作品「たけくらべ」には、吉原はなやかな頃の吉原が出て来る。これによって当時の風俗を知ることが出来る。殊に居つづけの客やお女郎衆相手の町芸人のことが、たくみに描写されている。よかよか鮎、軽業師、人形つかい、大神楽、住吉おどり、角兵衛獅子等が出て来て、知っている程の明治生れには懐しい。朝と云つても正午近く、町芸人達はそれぞれに異った身なりをして仲へ繰込んで来る。彼等は吉原周辺の町にほそぼそと暮らしていた。

今日の吉原はすっかりさびれてしまった。かつては遊興の町としてさかえたが、一度灯が消えたと、却ってどっちつかずの淋しい町並と化した。大店のあとも外郭だけを残し、トルコ風呂の看板に塗りがえられ、一步裏通りに入れば、かつ

ては満児達が賑やかに往来していたのが、敷石はめくれたまま、のみ屋の赤提燈が夜風にさむさむと揺れているにすぎない。



阿弥陀峯とその周辺

賀 幡 亮 俊

(京都・吉水学園)

秀吉と私との縁故は深い。今はこのことにふれないが、法然浄土教開宗八百年を記念して開催されている、知恩院名宝展を観るために、京都の国立博物館へ出かけるついでに、地つづきの太閤^{たいこう}坦から清水へ足をのぼすことにする。知恩院の数ある宝物の中で、私の一番好きな袈裟屏風とは、法然上人七百五十年大遠忌の特別展以来、十三年振りの再会である。照明のせいか私の記憶より年数の急速な経過を思う。屏風に貼られたその袈裟は、宋代美術の水準を示すもので、須弥山系宇宙の雄大な世界観を、一幅に収めた構図の素晴らしいこと、科学的な知識では把握できない。大宇宙の中心に如来を

位置づけ、日月の世界に夢のある動物を配し、人天界の図案化された描写の面白さ。これに秀吉の世界観を重ねるには、彼は余りにも俗人でありすぎるなど考えながら、東へと太閤坦をのぼる。

以前の太閤坦は、豊国廟に至るだけの寂とした参道であった。徳川氏によって滅ぼされるまでの、豊国神社の神域は五十万坪であったと伝えているが、今では七万余坪になり、神域に女子大を建設させてから、次第に校舎が拡張され、すっかり学生街に化した。現在太閤坦の東山通りに面したところは、少し急な坂になっているが、十年位まえは、そこは両側

が坂で中央の広い部分は石段になっていた。近時自動車の数が増えて東山線が混雑するので、山科方面から南下する車が、馬町通りを折れて、太閤坦を横ぎる道を利用するようになった。土地カンのない車は、太閤坦だけは、人が真中を通

るようにつくりだしている往時のままであることを知らず、両側が車道であることを示す矢印もみないで、直進してビツクリ、ゴットン・ゴットンと急ブレーキをふみながらおちていた。こんなことが重なって、太閤坦の人の道は、車の横柄さを許すことになったのである。ここからしばらくゆるい坂道をゆくと鳥居がある。この鳥居の横には平行して道がついているので、鳥居のすぐ前にある何段かの石段は登らなくてもすむのである。廟所までの石段の総数を五六五段というのは、この鳥居の前の石段と、現在は坂になってしまった先の東山通りに面した石段とを、加えなければ数があわないのであるが、私はどうしても登らなければならない五二三段のために、足の疲れをカバーして鳥居をぬけることを省略した。このあたりからは昔と少しも変わっていない。いまでは珍らしくさえ思える平坦な土の道をしばらく歩くと三四の石段がある。登ったところに廟の総門が、内側に砂をしきつめて建っている。終戦前まではここは白砂で、一般の人は総門を通さなかったと記憶している。この左手で登廟券を買って入る

のである。登廟券が要るようになったのも最近のことである。廟所は、私の訪れるときはいつきても四・五人に逢う程度であるから、券代は人件費にも足りないだろうと思つてみたりもする。

さて廟につながる石段である。これから先の石段の組み方は頗る変形である。石組みについていろいろと考えているうちに、それは秀吉の歴史を語っていることに気づいた。六三・六三・六三・六三と区切られて上へつづく。次は六一、そして櫓造りの中門がみえ、その手前に四段ある。三・四年前にはいたみのひどい茅ぶきの中門であつたが、いまみると銅張り櫓造りの真新らしさで建てられていた。豊国会のお骨折りの程が察せられる。中門をすぎると、一七二段が直線的につづいて墓所の前に出る。墓所をめぐる石垣の前に三段、中に七段がみえる。三丈一尺（九米）の巨大な五輪塔が、四方に何も刻まれないで立っている。秀吉は幼なくて他界した鶴松の病氣平癒祈念に、木ノ本の浄信寺のお地藏様まで馬を馳せたという。子煩悩の故に発願する信心はあつたようであるが、彼自身の生涯には、宗教的人格を感じさせない。そんな彼が永眠の地を阿弥陀峯に指定した因縁はなんだろうか。徳川以下七名の武將に連名させて、秀頼擁護の誓書をとつても、まだ幼な子の行末が不安でならなかった秀吉が、阿弥陀

峯という京の都を一望し、伏見及び大阪の方角をみはるかす高所に、墓所を遺命した哀れさ。豊臣家の将来を未来永劫に守護しようとする権化の魂をみる思いである。それはとにかく、六三段の謎はすぐにとけた。彼は六三才で伏見城に於て薨ずと記録されている。しかしその他の数についての答は、すぐには思いあたらなかった。ゆっくりと彼の歴史をよみ返しているうちに、おおよその見当がついたのである。法隆寺の謎を解明しようと努力された梅原猛氏ばりに推定すると、三四才は姉川の戦、六一才は明国との講和、四は朝鮮戦争の期間、一七二のうち七二と、石垣の前後の三と七を加えた八二の数は、織田信長が暗殺された一五八二年の八二に通ずるから、これに満数の百を加えて、信長暗殺という事件を、秀吉を祖とする豊臣氏百年の基盤にみたてた。それは亡き秀吉の霊に捧げうる最後の夢であろうか。したがって中門までの数は秀吉の歴史的現実とかかわり、中門から上の段数は豊臣一族の起点を語ると同時に、一族の安泰を願望する秀吉への慰霊とみなすことができる。

阿弥陀峯の呼称の由来は、土地の古老も知らない。また百科辞典にも記載されていない。この山は西大谷の墓地をはさんで、清水寺で知られる音羽山に対峙している。音羽山は阿弥陀峯の、中腹に建っている豊国廟の中門のあたりに相当す

る高さである。豊国廟は音羽山を見下す角度にあるが、清水の舞台から音羽の谷の向うに、阿弥陀峯を眺望する景の方が見事である。四季折々に素晴らしい清水の舞台からの眺めに、人々はある阿弥陀峯を視界に入れているだろうか。現在三万五千九百余坪の境内をもつ清水寺は、本尊十一面観世音菩薩を南向きに安置している。これはシナの南正面の建築様式をとりいれた為ばかりではなく、溪谷の自然美を前庭に構想してのことであろう。阿弥陀堂も釈迦堂も南北に並んで、西向きであることから、そのように考えられる。清水の舞台に立って阿弥陀峯をみているうちに、音羽山よりいくらか高い南の山は、京の町より眺めば右手になるが、阿弥陀仏の浄土を西方に立相する浄土教の立場から考えれば、この東山の山脈は、山科を正面にしているとみななければならない。山科から西に向って音羽山は阿弥陀峯の左にある。正しく観音菩薩は阿弥陀仏の左脇侍である。阿弥陀峯の呼称は清水寺に観音菩薩が奉安されて、以後のものであらうと推定してみる。そうすると京の町は西方にある浄土に相当し、山科から宇治にのびる平野は、生滅の世界に擬せられる。二十世紀の後半になって、山科の一带は活発に動きだした。生滅を代表して山科がどのように変りつつあるか、浄土を象徴する京の顔がどうであるか、については次にゆずらねばならない。



別府近郊

丹羽 演 誠

(大分県佐賀関町正念寺住職)

日出・杵築

の寺を訪ねて

日本一の大蘇鉄

大分空港から別府に入る少し前、別府湾の一番奥った所、城下カレイで有名な日出町があります。国道十号線に、日本一の大蘇鉄と大きな白柱が建っています。松屋寺と滝泉寺が並んでいます。

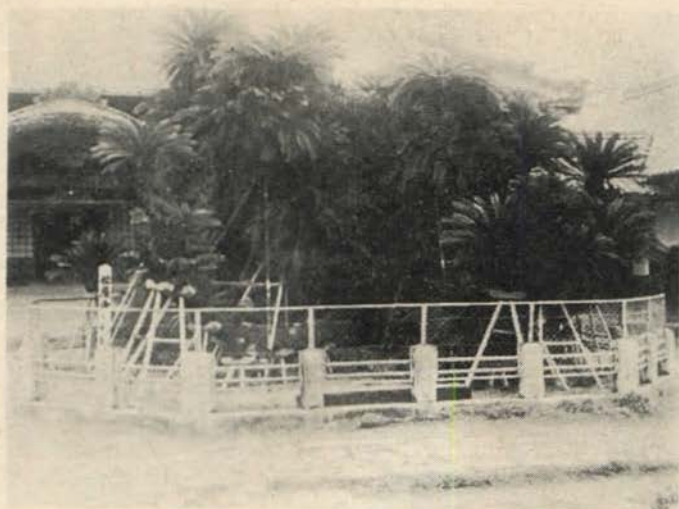
松屋寺は禅宗にて旧日出藩木下公の菩提寺で、山門を入れば、左に蓮池あり、大樟が数本境内を飾っています。石畳を行くと右に芭蕉句碑、石の釈迦仏がすぐ、横に参詣者を待っている様に在っています。昔の門の墓石があり、見上げる様な、大蘇鉄が、本堂の前を広がっています。見事なものです。

昔大友宗麟が南方から取寄せ、大分の古国府の大友屋形に愛育せしを、府内城に移し、木下公がこの寺に移植したものの、樹齢六百年、蘇鉄がこの様に育ったのも、何かしら、平穩に、人知れずあったからの様です。

木下公と云うと、木下藤吉郎、豊臣秀吉のことを思い出します。この寺は、秀吉の北の政所の母、朝日局の菩提寺です。

この寺は養老年間水月堂と号し、千手観音、不動、毘沙門の三尊を安置、文応年間、北条時頼ここに全国行脚の時宿し、以後、西明寺と改め、慶長元年、姫路城主、木下延俊公ここに封ぜられ、慶長七年延俊公は祖母に当る朝日局の菩提を弔うため、西明寺を修堂し、朝日局の法名康徳院殿松屋妙貞大

姉より、康徳山松屋寺に改名、現存本堂大正年間の建築。庭に雪舟庭、万両の大木は立派です。



松尾寺本堂前の日本一のそてつ

松尾寺境内芭蕉の句碑附近



宝物は、秀吉が朝日局に贈られたもの、李期の磁器、又藩主夢中体現の千体観音図、あり。

参拝後木下公の廟所に参る。大小の石碑、美しく祀られていました。念仏回向して山を下ると時期はづれのワラビが石段のところから殿様への供華として、のび立っていました。

滝泉寺は浄土宗、帆足万里先生の菩提寺と立柱あり、本堂にお参りしていると、住職山崎雄達上人、一片の紙を頂いた、当寺の有名な略歴です。誰も知らないでしょう。有名な、「荒城の月」の滝廉太郎の先祖、木下家の家老の墓もこの寺にあるのです。お墓に詣でてあちこちと見廻わすと、急に昔人に話がしたくなって来ました。寺はこの人々によって今日まで育てられ、伝えられて来たかと思うと、歴代、住持の努力と信仰の深さが思出されます。

お梅の華蔓

杵築の寺町は坂に沿って昔のままの土塀に落ちついた昔日の面影を残しています。今日は浄土宗の長昌寺、正覚寺に参詣します。

松岳山寂照院長昌寺。江戸中期名園枯山水の庭を有し、八間四面の大伽藍は山門から参る人々に大樟の老樹と共に、旧松平公の奥方の菩提寺として充分なる風格を味わえます。

松岳は初代重勝公の法名、寂照は重親公の法名、長昌は杵

築藩主二代松平重忠公の令室の法名、墓は寛永四年松平重直公一寺を摂津三田に創立、松岳寺と称す。江戸深川靈巖上人の高足、存眷一無上人開山。公豊後高田を経て、杵築に居城、寺之れに従い、現地域に建立。現住、今井光喜上人。

夕暮の本堂に在し、本尊阿弥陀仏を拝んでいますと、尊顔美るわしく、何かしら、心に打たれるものがあります。今井上人に聞けば当寺二世誓眷存超上人の時、藩主重栄公、寺社奉行を退官の折、南都より当寺に寄進されたとの事。恵心僧都の作と伝うと、又増上寺の黒本尊と団体とか……

銅の華蔓が二つ古びているのに気が付き、年号を見ると元禄十三年お梅寄進とあります。お梅の方は、藩主松平重賢（重栄）公の娘にて、母は正室、近江の膳所本多公の息女でした。お梅の方以外に子供なく、世嗣の男子もなかったのです。そこで、家臣の間から側室に町からお袖の方をいたします。たまたま藩主の姉君が一柳公に嫁ぎ、主人の逝去後、帰藩していました。姉君と正室とは仲はよくなかった様です。

正室は、年一度、花見に姉君や側室を招待する習例でした。今年も二人をお招待いたしました。姉君とお袖の方は二人して正室を追放する様、計画を謀っていました。たまたま昼餉を頂いて、夜二人共腹痛をうったえます。これ正室が二人を利害する意図ありと藩主に申出て、正室を離婚に持込み、遂

に離婚となるのです。正室は、近江の本多公の下に帰るべく侍女七人と杵築城を去り、船にて八坂川口に至る時、侍女の一人が投身自殺をするのです。その遺体の中より一通の手紙があり、正室の事件は、二人の方の謀計にて残念でたまらない、死して、二人を怨むとの事……やがて袖の方は正室となりましたが、殿中、昼となく夜となく女中の靈に悩まされ病気になる次第です。この靈を慰めるために、六仰の寺院に祈禱を願いますがその効なく、誓着上人に相談いたします。上人不断念仏をすすめ、又お袖の方は、常に弥陀の三尊を念持仏としてもち、念仏を称する様に、又寺には念仏堂を建て不断念仏を修す。三十人扶持を受ける。庭の一個の一字これです。この供養に依って靈おさまる、時元禄九年なり。名園を眺め念持仏を拝んでいると、何となく人の世のあましさか偲べれます。お梅の方の寄進も母菩提のために、この一幕と語っているのです。

処刑場の念仏

夕暮の寺町はしづかです。坂を登って正覚寺に着くと陽は薄黒く山門を掩っています。山門脇の金仏を拝み、五尺許り金仏は、何を語っているのでしょうか。

住職、齊藤良光上人と語る。この寺は開山元守和尚、本多公の菩提所、公に従って当地に移る。

盧遮那仏（金仏）は、正覚寺末の正寛寺のもの、この由来喚着上人の弟子、寂蒼是三比丘の物語であります。

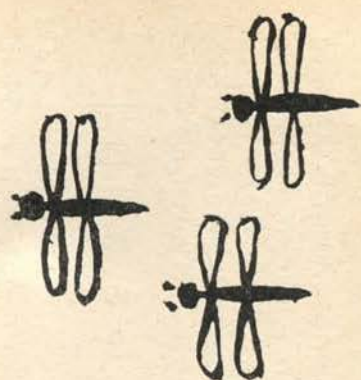
土屋北彦著「大分の民話」「正寛寺の由来」の章を開いて見ますと、

寛保二年夏、杵築の旅籠「美満屋」に雲水僧が喜捨を乞う。主人孫十郎、妻を一昨年なくし、長男、昨年から長病と心淋しい折なれば、妻の回向を願う。見れば御僧長い間の行脚なれば、その発心を語られよと。

雲水、もと江戸吉祥寺の小姓、吉三郎にて本町の大火に八百屋久兵衛一家吉祥寺に避難。その中娘お七と恋仲となる。新居出来れば、一家帰り、兩人の恋も遠ざかる、お七恋慕の余り、新居に放火、かくすれば又、吉三郎と会えることと、お七その時十六才。天昭三年お七は放火の大罪にて火あぶりの極刑となりました。私どうすることも出来ず、墓前にて切腹せんとすると、お七の幻現われて恐しい相、我を忘れて手を出す様、遂に靈を慰めるべく全国行脚の旅に出ました。寂蒼是三比丘として、今日ここに着いた次第です。

孫十郎、比丘の態度に感激し、お七及び、処刑者のために、昔の処刑場に一寺を建立して念仏回向すべく喚着上人の導きにて、金仏を祀りて、念仏しました。

行脚の折の地藏尊、正覚寺にて拝んだ折、無縁の靈の法悦を目前に感じた次第です。お厨子の裏に、私果てた時は、美満屋に届けて下さいと記してありました。



特集 生活の中に生きる仏教

日頃何気なく使われていることばの中には仏教から派生したものが数多くある。それは本来の意味から遺脱したものもあれば、またその教えを忠実に伝えるものもある。そうした中から親しみ深い二、三のことばをとらえ日常生活に自然にとけこんだ仏教を見ることにした。

一 いも 蓮 れん 托 たく 生 しょう

この一蓮托生は、仏教經典にその典拠を見い出せないが、浄土三部聖典の一つ、『阿彌陀經』に、「諸の上善人と俱に一処に会す」とあるのが、最もこの意味に近いようである。すなわち、死後、極楽浄土で同じ蓮華の上に生まれることをいうのである。それが、生死を共にすること、善くても悪くても行動、運命を共にすることの意味に使われるようになった。

た。

この内容について、サンユッタ・ニカーヤという原始經典に、

「自己よりもさらに愛しきものはどこにも存在しない。同様に他の人々にもそれぞれ自己は愛しない。故に自己を愛する者は他人を害してはならない」

とある。このようになれば、もはや互いに対立し、相争うことはなく、一方の犠牲の上に他方が利益を得るということはなくなくなる。その結果、他人と協力することによって、ますます自己が実現されるようになるであろう。この姿を社会においてのみでなく、死ぬ時もこのようでありたいと願うこと

が一蓮托生である。

ところで、この一蓮托生は、国文学の中によく出てくる。

まず『源氏物語』鈴虫の巻に「後の世にだに、かの花の宿の宿りに、へだてなく」とあるのは、この意であるし、また浮世草子『新色五巻書』四には、

「死ぬべき時に死なざれば生き勝る恥。さあ潔く互に最後を急がん。未来は一蓮托生。南無阿弥陀仏」

と明確に出ている。

さらに心中物を特意とした近松の『冥途飛脚』に、「これぞ一蓮托生を慰めつつ」とあり、単に「一蓮」だけで、この意を示す場合もあるのである。

なお、蓮は、インドにおいて最高に芳しく典雅な華とされている。たとえば最高にすばらしい女性をギリシャではヴィーナスといい、インドではパドミニ（蓮女）という。また最高の死後の理想世界をギリシャではエーリュシオン、インドでは蓮華藏世界ともいう。このように理想的な姿、世界は、インドにおいて蓮で表現されている。

それ故、さとりの世界である浄土に咲きほこるこの蓮の一ひら、すなわち、さとり片片に想いをよせ、それにすがって共に生きようというのが、この語の意と考えられる。

（西村実則）

縁えん

起き

釈尊が悟られた真理とは「縁起」の理法であったという。この「縁起」とは、この世におけるすべてのものが因縁によって生じ、そのようなものとして仮に成り立っていることをいう。存在するものは条件によって様々に変化し、互いに依存し合いながら、決して独立した存在性をもたないということである。

「縁起」の思想は仏教の世界観の根本原理となるものである。それは実相論と並んで教理を決定づける理念であり、仏教の歴史的展開に対し一貫して説かれた思想である。原始仏教経典に説かれる十二縁起説（十二因縁）をはじめ、中観派の中観縁起、唯識派の頼耶縁起、如来藏経典に説かれる如来藏縁起、華嚴宗の法界縁起、真言宗の六大縁起などの諸説が種々に理論づけられたのである。この中で、「無明―行―識―名色―六入―触―受―愛―取―有―生―老病死憂悲苦惱」と十二支に縁起する組織体系を説き示した「十二縁起」の展開は、いわゆる縁起論の原点である。つまりそれは同時に、

釈尊の到達した普遍的な世界観・人生観を物語るもので、仏教の出発点となるものであった。『中阿含経』という初期の仏教の教えを集めた經典には、「因縁及び従因縁起を見て、如真を知る。此れに因りて彼れ有り、此れ無ければ彼れ無し、此れ生ずれば彼れ生じ、此れ滅すれば彼れ滅す。謂く無明に縁りて行有り、乃至生に縁りて老死有り、若し無明滅すればすなわち行滅し、乃至生滅すればすなわち老死滅す」(卷四十七「多界経」)と説かれている。

このように「縁起」とは仏教思想の根幹を支える教説であるが、現在私達が日常語として使う時には、「縁起がよい」とか「縁起が悪い」などといとも簡単に話言葉の中に消化してしまふ。物事の吉凶の前兆などという意味で用いるこのような言い方は、「縁起を祝う」とか「縁起をかつぐ」、あるいは「縁起物」とか「縁起直し」などと様々な成句を生み出した。

さらに「縁起」という概念がもともと「因縁」という訳語によって通じて解釈されることから、転じてわが国では、社寺や仏像絵巻の由来や諸種の靈驗談奇瑞譚の縁由など記したものも、物事のはじまりという意味で、「縁起」と呼ぶようになった。「何々寺縁起」、「何々神社縁起」、「何々縁起絵巻」などといわれるのがそれである。

(原 裕)

以^い心^こ伝^{でん}心^こ

字句の説明なしでも、意味は明らかであるが、では一体何宗でこのように言うのかというをわからない人も多いであろう。それはとりもなおさず、インドから六世紀初めにシナに渡来した達磨によって開かれた禪宗においてである。この禪宗において以心伝心は不立文字、教外別伝とともに禪宗の特色であり、生命である。

インドにおいて解脱をなす方法としてのヨーガは、初期形態においてはアクロバットのようなものでは全くなく、沈思端座し、「心」を静めるものであり、これがシナに伝わり禪といわれたのである。

この「心」を重視し、他の仏教各宗のように特定の経論に絶対的權威を認めないのが禪宗である。そのために思想、教義よりも家風、すなわち師資接得の風案を重視した。

このような禪宗も、教団として存立するには、教えを伝承して行かねばならない。

その伝授のインドにおける最初は、ある日釈尊が、靈鷲山

で説法していると、梵天が現われて美しい金婆羅華を献じた。それを受け取った釈尊は、一本の茎を拈って、揚眉瞬目した。人々は何のことかわからなかったが、迦葉という弟子ただ一人が微笑を浮かべた。そこで釈尊は、わが教えは、迦葉に伝わったと言った。

これは「拈花微笑」ともいうが、これこそ「以心伝心」そのものであり、禪宗の起源とされている。

それ故、禪宗はインドで作製された經典類には依らず、以心伝心の立場からシナ語で心より発する言葉を公案、古則、語録の形をとってまとめようになり、後世、文字の宗教と化してしまった。

しかし、シナにおいて国家的な会昌の破仏などが起り、他宗が経論を焼失されても念仏宗と禪宗とのみが、存続し得たのは禪宗における以上のような理由によるのであろう。

このような禪宗において、「以心伝心」という成句は、その生命であるが、この用語は従来、禪宗の祖、達磨が立言したとされてきたが、実は華嚴宗の圭峰宗密（七八〇—八四一）が撰述した『禪門師資承襲因』と『円覚經大疏鈔』とにおいて初めて出てくるのである。

この宗密という僧は、経論を重視する禪宗以外の諸の宗派も禪宗と結局は同じ教えに帰着すると説き、心は「法源」

（法の源）であり、われわれの心がそのまま仏であると説いた人である。この宗密の言葉が、禪宗の特色の一つを表わすようになったのである。

この心から心へという考えは、密教が唱えたように、現代において禪宗に限らず、仏教すべてに共通し、人々の信頼関係を表わす言葉として、受け取られるようになったようである。

（西村実則）

愚痴（愚癡）

私たちが現在使っている愚痴の意味は、愚か、ばか、言ってもしかたがないことをくどくど言って嘆くことであるが、もう一つ忘れてはならないことは、この愚痴ということばは仏教から伝わってきているということである。それは三毒（貪、瞋、癡）や根本煩惱（貪、瞋、癡、慢、惡見）の一つであり、人間の根本的な愚かさを言うのである。

この「愚痴」という語は、もとはサンスクリットのモーハ（moha）の訳で音訳では莫何という。そして現在愚鈍の者を馬鹿といっているのは、このサンスクリットでいう莫何が

変化したものである。

愚痴の意味は、言いかえれば人間の生きる道、基本となる道理を知らずしてただ目先にうつる物事、様々な現象に惑わされて、正しく判断することができず、それに迷うことをいう。

仏典よりその用例をあげるならば、たとえば『俱舍論』には、愚痴の痴とは「これ無明、無智、無顯なり」とある。これは仏教に説くところの正しい道理を聞いて理解することができない。大慈大悲の仏の智慧を知らない。このようなことから自分の心は自分の言動に執着して迷い、そのことに自分も気がつかないのである。さらに言うならば、人が誰でも生まれながらにして持っている力や可能性、進むべき道を知ることができない。

愚痴とは本来、このような意味で仏の教えに無知であることを言うのであろう。

同様に、『阿毘達磨順正理論』では、「痴は謂く愚痴なり、所知の境に於て理の如く解するを障へ、弁了の相なきを説いて愚痴と名づく」と説き、また浄土教の『和語灯録』には「聖道の修行は智慧をきわめて生死をはなれ、浄土の修行は愚癡に還りて極楽にうまる」とあり、これは聖道門、つまり自ら成仏する力、自力法門の天台や真言に説くところの仏道

修行の仕方である。

これに対して浄土門の修行というのは、いま、今世にこうして愚痴な私たちが、その愚痴であることを知り、弥陀の本願に頼ることによって、来世に浄土に往生を願うことであると教えているのである。そして弥陀の名号を口称専念するところに、はじめて自らが愚痴より救われ得ることを説いているのである。もとより聖道門といい、浄土門といい、仏のひとつの教えであるから、そこにいさかも相矛盾するものがあるべきはずはなく、ただその認識の仕方、修行の方法にその特色が強調されるものである。

このように愚痴については、經典の中に数多く説かれているのである。
(富田生久)

対機説法

対機説法における「機」とは、衆生の心の中に具わっている、仏の教化を受ける時に働く潜在的な素質をいう。仏教では、機を機根ともいい、それが心の働き、衆生の根性の意になった。われわれが普通よく使う臨機応変の「機」は、そ

の状況、時に応じてふるまうことを言うが、この対機説法の「機」には本来機會（チャンス）の意はない。

昔、釈尊が、苦行の末、人民教化のために法を説かれた。そして自分一人であらゆる場所に行けないので、弟子達に伝道の旅に出発する時に諭した言葉がある。それは、

「二人して一つの道を行くこと勿れ」（パーリ律の小品）

であり、その理由は、できるだけ多くの人々に法を聞かせるためと、真の説法は一人と一人との対話によって可能であると考えられたからである。多数の人々を前にしては、人それぞれ個性が異なる。それ故、一対一で、その人に応じて法を説かねばならないとされたのである。

日本の平安時代に国を護る經典として珍重された『金光明經』の中に、

「此の諸の衆生に上中下あり、彼の機性に随つて為に説法す。然も仏世尊には分別あることなく、其の器量に随ひ、善く機縁に應じて彼の為に説法す」。

とあるのは、この意をよく表わしている。

ところで、説法の「法」は、サンスクリントのダルマの訳で、法則、法律、規準、また真実、最高の教え、事象の意であることは周知のことであろう。

古代インドでは、人生に四つの目的があり、それはカーマ

（愛）、アルタ（利益）、モークシャ（解脱）、ダルマ（法）である。

まず、カーマは愛情と性で、ヴァイツヤヤナ（四世紀）作の『カーマ・スートラ』に詳しく説かれている。たとえばインドのヒンドウ教寺院の彫刻は、まさにカーマ（性）の讃歌とも言えるであろう。次のアルタは、利益、実利で、技術、政治などに関して用いられ、カウティリア作の『アルタ・シャーストラ』が代表的な書である。第三のモークシャは、宗教的解脱で、バラモン教、ジャイナ教、ヒンドウ教、仏教等がめざす境地をいう。

さて、ここで問題とする第四のダルマは、『マヌ法典』における如く刑法、民法などの法律に関する語として用いられた。しかし、仏教においては、いちじるしく哲学的宗教的な意味が賦与され、先の如く、行為の規範、また人間の行為的現実を成立せしめるためのかた、の意に発展したのである。

このような「法」を、人々の精神的素質「機」に應じて、ある時は平易に、ある時は深く説くことを対機説法という。このようなことは、当然だとする人もいるが、私達は専門的な知識を持っていると、難しい言葉で相手を眩惑したり、相手から距離感をおいて自己を誇ろうとする気持ちがあるが、そういうことを暗に戒めているのである。

（西村実則）

四^し苦^く 八^{はっ}苦^く

仏教の人間観によれば、「人生は苦である」と受けとめる見方がその基本的な姿勢である。それは仏教の根本思想を表明する四つの旗印である「四法印」の帰結となる「一切皆苦」「すべてのものは苦である」の理念によってまず代弁される。そしてこのことは、釈尊の最初の説法におけるもっとも重要な教義である「四諦」の概念によって一層明瞭に体系化されている。

「四諦」とは四つの真理のことで、「苦・集・滅・道」の四種の概念がそれである。「苦」とは迷いのこの世界はすべてが苦であるというもので、その原因は人間のもつ欲望であるということが「集」で、その欲望を減し尽した状態が苦の減した理想のあり方すなわち「滅」であり、「道」はそのような苦を減するための正しい実践道である。この実践道とはとりもなおさず「八正道」の精進を指すわけだが、ともかく釈尊はこの正しい修行実践の必要は人間のもつ根本の苦悩を解決するためであるとした。

このように「苦」というものは、ある意味では仏教理念の基本を形成する発想ではあるが、とりわけ人間の存在を規定する基本的な苦悩として、生・老・病・死の「四苦」を挙げ、そしてさらに、生きて行く以上どうしても避けられない苦しみとして、愛別離苦（愛するものとはかならず別離しなければならぬという苦）・怨憎会苦（怨み憎しむものとは会わなければならぬという苦）・求不得苦（求めるものは得られないという苦）・五陰盛苦（人間の身心を形造る五陰（五蘊）をもととして盛んに起る苦）との四つを加えて、「四苦八苦」の根本の苦悩を教える。実際、これらは人間の努力精進を越えたところの苦悩なのである。このように分類された人間苦の様態は、精神面、物質面の両面にわたって、人間のありのままの存在と表裏一体をなすものであり、おのずと人間本然の姿を写し取っているものといえよう。

「苦」すなわち苦しみとは人生においてはまずは障害となるものである。その「苦」を分析して、人間の存在の本質的な性格を鋭く指摘した仏教の人間観が、「四苦八苦」の言葉の中には秘められているのである。「物価高で生活に追われてもう四苦八苦ですよ」「むずかしい問題で四苦八苦して解きました」などと現在では日常の話し言葉のうちにこの「四苦八苦」という用語を使うが、その意味内容も『広辞苑』に

記すところの「あらゆる苦しみ」とか「非常な苦しみ」という転じた意味だけではなく、仏教用語としてはきわめて含蓄の深い内容が盛り込まれているのである。

(原 裕)

往

生

往生とは、死ぬことであり、また諦めて、おとなしくなること、さらに、どうしようもないようになること、閉口し、困り果てることをいう。

この語は、サンスクリットのウトパドヤテ、ウパバツティなどの訳であり、往きて生まれることで、極楽世界に生まれることである。往生とは、本来、さとりには達し、阿弥陀仏のまします西方極楽世界に生まれ、成仏を得た状態をいうのである。

このような浄土に往生するには、無上なる正等覺に對して、心を起して（発菩提心）生まれようと願い、口に念仏を称えることである。このようになす人は、死後、必ず往生できるのである。

そもそも、浄土經典が編纂された目的は阿弥陀仏の極楽浄

土、安養界への往生を示すことであった。さらに法華經においても薬王品に、命終れば、極楽浄土へ往生すると説いている。

これらの大乘の菩薩における自利利他の完成は、往生を意味し、西方の無限のかたにある浄土に生まれることである。そして、たえず、この世を穢土とみなし、彼岸の世界は、無垢清浄な浄土という考えが根柢にあるのである。

ただ、浄土といっても東方には、阿閼仏の妙喜国、あるいは薬師如来の浄土である淨瑠璃世界、上方（サンスクリットのウッタラは、北方の意もある）には、弥勒菩薩のいる兜率天に死後到ることも往生といっているが、後世、シナ、日本で、もつとも影響の大きかったのは、阿弥陀仏の浄土である極楽世界の觀念である。なお、仏教では、仏教以前のヴェーダ聖典、あるいは古代ウパニシャッドにおいて説かれた神々は、迷っているとするとするから、それらの神々のいる天界に生まれても、輪廻の世界に生まれたのと同じで、さとの理想世界に生まれたのではないとする。

ところで、このような浄土に生まれるというのは、特別な生まれ方を意味する。インド思想において生の種類に卵生、胎生、湿生（ボウフラなど）、化生の四つがあり、前の三つは、人間や動物の生まれ方を指し、化生は、他に依存するこ

となく、自らの力によって忽然と現われる生まれをいう。このうち極楽への生まれ方は、化生であり、普通にわれわれの考える生類（仏教では有情という）の生まれ方と全く異なるのである。

先にも述べたように、われわれは死ぬことそのものを往生したというが、その中に、仏教徒としての宗教的実践が含まれていることを看過できないであらう。

（西村実則）

自業自得

「自業自得」という言葉がある。みずからのつくった業のために自分の身にその報いを受けることをいうが、一般には悪報というような意味で使われ、みずからの悪業（悪いなしわざ）によって苦しみ災いを招くという内容である。たとえば、「昨日はとんだ災難にありましたよ。これも日頃の振舞いの結果で自業自得というものでしょうね」などと話し言葉にはよく現われる用語である。

しかし本来の仏教語としては、善悪の業によって受ける楽しみや苦しみことで、とくに苦の面のみを報いとして受ける

ものではない。なぜなら、「業」というものにはもともと善悪二面の意味合いが含まれており、現在のように、たとえば「宿業」などという暗いイメージの言葉で代表されるような悪い観念ではなかった。そして「業」とは、現実世界における人間の存在のさまざまな差別相を生じさせるもので、つまりは日常生活における人間の性格の特性を規定するものであった。すなわち、現在の自己の存在はすでに自己自身の責任において成り立っているものであり、そこには来るべき時に向って善因（善いなしわざ）をなせば、おのずと善果（善い報い）を得る可能性もあるわけである。

まさに「自業自得」とは、過去・現在・未来の三世にわたっての因果応報の道理を明示したものであり、仏教教義ではきわめて重要な概念とされる業思想の「内容である」。「自業自得」によって招いた報い、すなわち「果報」を「自業自得果」というが、ここでいう「果報」ということも善悪の二面に通ずる言葉である。つまり、現在の姿は過去におけるなしわざを因としてその結果の報い、いいかえれば「果報」をしてあるもので、未来の姿は過去の果としての現在を因としたその「果報」としておのずから定められるのである。別の言葉を借りるならば、因果論に包摂される内容が「自業自得」という用語の裏付けとなる思想であらう。

ちなみに「浄土三部経」の中『無量寿経』には、「人は世間愛欲の中に在りて、ひとり生じひとり死し、ひとり去りひとり来り、まさに行きて苦楽の地に至り趣くべし。身みずからこれにあたり、代わるものあることなし」（巻上）と説き示されている。確かに、みずからの行為が善とも惡ともその応じ報いるところとなるという。「自業自得」——まことに肝に命じて日頃の精進努力を堅実にいたしたいものである。

（原 裕）

馳

走

現在日常的に使用されている「馳走」の意味には、かけ走る。または馬を走らせる。酒食をもつて人をもてなす。もてなしの飲食物、りっぱな料理等の意味がある。

元来は、この「馳走」という意味は、字句からも明瞭なように、かけ走る、走り廻ることであるが、仏教ではただ走り廻るというだけではなく、走り廻って他のために奔走する意味として使われていたのである。つまり、仏教という利他の精神で、馳走奔走することを意味したものである。いうなれ

ば、仏教の慈悲の精神を他を利するためにかけ廻る行為全般をさしたものであろう。

現代では、デパートやスーパーマーケットへ行けば何んでも安値に材料をそろえることができ、またインスタント食品も発達している。しかし昔は人をもてなすのに、畑に野菜を取りにゆき、海や川へ魚を取りにゆかなければ、おいしい料理も作ることはできなかった。何人もの人がそのようにかけ走り廻り、手間ひまかけなければできないことであった。

このように、この馳走の本来の意味、他のためにかけ廻る、ということから他人をもてなすということになり、それにはまごころがこもるのであるから、誠意のある供応を馳走と呼んだのであるが、やがて供応そのものの呼称となったのである。

私たちが飲食の場合によく使う「御馳走」という言葉は、この飲食物のなかに人のために奔走してくれたいっさいの力がこもっていることを感謝する心持ちがふくまれているのであり、一粒の米も、多くの人の力によって起こる（縁起）ことを悟り、その恩に感謝する（感恩）という仏教の思想が日常語に現れたものである。

さらに、この馳走は日常の食膳に対しても、美味の賛辞として「御馳走」と呼ぶようになったのである。（富田生久）

方^{ほう}

便^{べん}

「うそも方便」——まずは都合のよい言葉である。世の中を生きて行く上において、人間関係を無事に運び、物ごとを円滑におさめるには、巧みな手際のよい手段というものが必要である。この喧噪と不安と憶測の日常世間であってみれば、人間の適度に知的な配慮が目的達成のためには、いわゆる「方便」という言葉をもってさまざまな便宜的な手立てを生むのであらう。

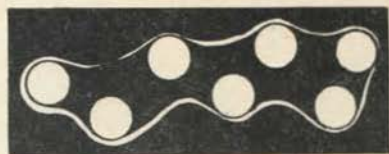
この際の「方便」という言葉は仏教の基本的な用語で、近づくとか到達するという意味のサンスクリット語「ウパーヤ」の漢訳語であり、元来は、仏が衆生を教え導くためのすなわち悟りへと到達させるためのその巧妙な手段方法というのが原意である。転じて、真実の教えを説くために仮に示された法門を意味するが、それらはいわば衆生が進歩し向上するために用意された仏や菩薩の巧みなばかりであった。

つまり「方便」とは世間におけるはたらきである。人生を精一杯の努力精進として、うるおいのある暮しを送るため

に、「方便」とは仏によって示された生活の知恵であった。たとえば、經典には「善巧方便」(ウパーヤ・カーウシヤルヤ)と、熟した基本用語が示されているが、この言葉こそ、「方便」の知恵のはたらきをもっているのである。

まさに歴史的な仏教の教団において考え合せると、出家に對して世俗的な立場である在家の信者に示された恰好の理念であったといっても過言ではあるまい。いうならば「方便」とは、決して深遠高邁な教義理念ではないが、世俗的なあり方として高度に消化された用語であらう。すなわち「方便」とは、比丘・比丘尼という修行集団において主に用いられたのではないのではないか。むしろ、在家信者の指導理念としてきわめて有効に標榜されたものではなかったか。「方便」とは、あくまでも仮に設けられた巧みなかりごとであり、それは専ら衆生の教化済度のために説かれるものであった。

このように考えてみると、「方便」とは、現代の私達が使う日常語としての意味内容が、仏教的な概念的の継承をきわめて忠実に表現しているものといえよう。むしろ、親念の世界を離れて、何気なく使う私達の生活用語の中には、この「方便」のようにつとに示唆的にしかつ意味深い言葉があるのである。



法然上人靈場めぐり Ⅱ第五回Ⅱ

村上博了

第五番札所

粟 生

勝尾寺二階堂

上人二十五霊場第五番の札所は、大阪府箕面市粟生の勝尾寺二階堂である。同寺は京都大阪のほぼ中間、嵯峨を経て洛中への通路に当り生福寺同様真言宗古義の名刹であった。同寺西の谷二階堂に、上人七十六歳の承元二年から七十九歳の建暦元年十一月まで四ヶ年間居住毎日専修念仏に送られた由跡霊場である。現在の堂宇は大阪一心寺中興真阿願興上人の再建である。御詠歌は

柴の戸に あけくれかかる 白雲を

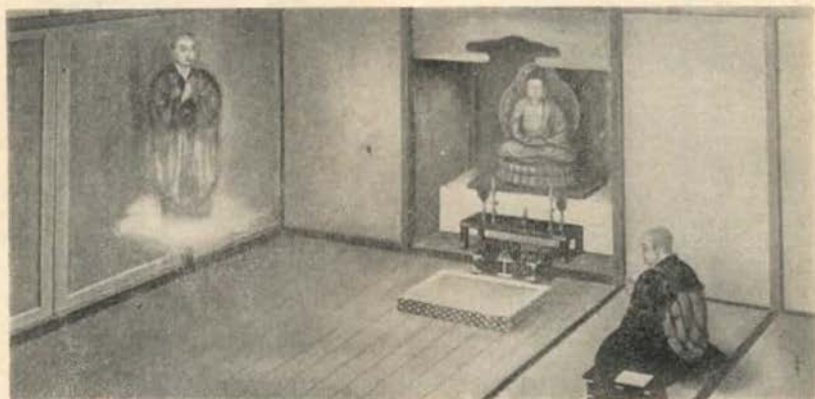
いつ紫の 雲に 見なさん

と云う。いかにも明るいお歌である。承元元年十二月八日「恩免ありとも洛中入り未だし」と言う暗いイメージがない。上人は心から明るい洒脱したお方であった。

上人の居間から柴の戸が見え、朝な夕に白雲が棚引く風流さを味わっては、この白雲を何時五色のお迎いの雲と拝めようと、心の姿をす直に謳われて、お念仏されている様子が目に見えるようである。

上人が勝尾寺に移られた年の十一月八日、関東の豪族宇都宮弥三郎頼綱が上人をここに訪ね、念仏往生の教化をうけて感銘入信、実信房蓮生と号している。

又勝尾寺恒例の引声念仏会に結縁されては、僧衆の法衣袈裟等がいたんでいる様子を御覧になつては、使を京都の篤信



四国からの帰路滞在、善導大師と夢中で会見された処

〈知恩院所蔵〉

者に送り、如法の装束等十五名分を、寺僧に贈っていることは、専修念仏と同時に教化伝導も平生熱心に行っていたからである。

お詠歌を拝していると、上人の教化の恩情が強く迫ってくるものがある。その(一)は照顧脚下ということである。現在の一步すぐさま生かして、お念仏を申し給えということである。無常迅速である。明日ありと夢にも油断すべからず、いつ無常の風にさそわれてもよいように、つねにお念仏を申し給えということである。その(二)は、人生希望を持つということである。希望のある所戒律が生き、生き甲斐を発見することが出来る。念仏すれば、何時も一隅を照す、明るい人生、明るい家庭、明るい光明の社会を請来することが出来る。老も若きも男女を問わず、専修念仏こそ、現世に於ても心やすらかに毎日を送ることが出来る、いざ念仏を申し給えと教えられる。

上人は一山七十余名の僧衆が、一切経がなくて、研讀出来ないよしをきかれては、御所持の一切経を京都からとりよせて施入された。御伝には

住侶随喜悦予して老若七十余人、はなをちらし 香をたき 幡をささげ 蓋をさして、むかへたてまつる

と、最高の如法の礼をつくして、一山をあげて喜び迎えたの

である。この経論開題供養法会には、京都から聖覚法印を招請された。法印は法然上人に再会をよるこび、唱導された。一山では山主はじめ聴衆一同感激し「袖をしぼらずということなし」と大感激であった。

上人在山四年目承元四年三月廿一日彼岸会に、唐の善導大師と夢中対面せられ、上人の専修念仏伝導を感謝して、浄土の秘籍と布薩戒を残らず相伝された霊地と伝えられる。二階堂本尊は、両上人が夢中相伝壁板であって、宗祖上人の護法心が活きている霊場である。

第六番札所

大阪

天王寺念仏堂

法然上人廿五霊場第六番札所は、大阪市天王寺区元町天王寺（又四天王寺）の念仏堂（常行堂・引声堂）である。天王寺は聖徳太子開創で日本最初のお寺であり、太子七日間別時

念仏修行の霊場と伝えられる由緒寺院である。又石の大鳥居には釈迦如来転法輪所、当極楽土、東門中心と片額が掲げられている。鳥居を入ると左手北側に念仏堂がある。

上人が専修念仏は阿弥陀如来の御本願であり如来の発遣仏は釈迦如来で二尊共に常に、お念仏をすすめ給う。極楽世界に最も近い天王寺がその霊場として、上人も法皇とよく赴かれたようである。まして主務慈円僧正とは熟知の間柄であった。かつて、上人天王寺に在した時に、当時教界無双という高野の明遍僧都も、上人に弟子の礼をとったことも又有有名な物語りである。

御詠歌は

阿弥陀仏と 心は西に うつせみの

もぬけはてたる 声ぞ涼しき

と云う。他力本願の味がよく出ている。専修念仏は、無心に「助け給へ南無阿弥陀仏」と唱える時、如来の加護と護念を得て、めで度く往生の素懷を得る。上人の高弟法性寺空阿上人もここで不断念仏会を修行された霊場である。天王寺営繕は、江戸時代まで日本全寺院に勧進した点に於て、上人のお念仏の功德の偉大さが痛感される霊場である。（国鉄天王寺駅地下鉄谷町線利用がよい）



法然上人が念仏を修行し病人に施粥した処

〈知恩院所蔵〉

第七番札所

大阪 一心寺

上人廿五霊場第七番の札所は大阪市天王寺区逢阪上之町にある一心寺である。同寺は文治元年（一一八五）春彼岸、上人五十三歳浄土宗開宗十周年記念の時、天王寺別当慈円僧正に招ぜられ天王寺村現在の西門坂のほとり、茶臼山の麓に四間四面の草庵を結び、新別所（後の一心寺）として、日想観を修行された。又後白河法皇も、天王寺参詣の時、上人と同座で日想観を修せられた由緒寺院である。その時上人は

阿弥陀仏と　いうより外は　津の国の

なにはの事も　あしかりぬべし

とお歌をよまれた。法皇はこれに応えて

浪華渦　入りにし日おも　ながむれば



処に修した観想と日法皇白河後が上人然法

<蔵所院恩知>

よしあしともに 南無阿弥陀仏

とよんでいられる。共にお念仏の功德をたたえていられる。

上人のお歌は、一心寺御詠歌である。

さて寺号の一心ということは、上人四十三歳承安五年春、浄土宗開宗のスタートだった観経疏一心専念の文から採ったのである。

上人が浄土宗開宗となった一心専念の頭文字を、寺号とされたことは、上人の同寺に対する深い誓願而も極楽世界の東門と最短距離に位置することは、上人の暖かい思いやりが一通りのものでない。大慈悲心がこめられている。

一心寺が施餓鬼、納骨、骨仏の寺院として有名であることは、上人が大慈悲心を具体化したものである。五百らかん図にも餓鬼供養は施餓鬼会であることを願う時、上人と法皇さまが、有無両縁精霊得脱の誓願具現の大霊場と発願されたものである。同寺は徳川家康公大阪攻の茶臼山御本陣跡であり、大阪方謀将真田幸村の地雷攻撃時、黒本尊の靈益によって、家康公危うくのがれたとも云われる。黒本尊安置跡が現在一心寺とも云われる。時の一心寺本管存半は、両軍戦死者を寺内に埋葬供養した。法然上人の立派な墓地があり、参詣者跡をたたないと云う。(国鉄環状線、阪和線、関西線天王寺駅下車)

選釋集講詠

第十四章段

諸仏唯証誠念仏篇

諸仏はただ念仏のみ証誠す

佐藤良純

(大正大学助教授)

一

選集第十四段は、念仏証誠章ともいわれていますが、正式には「六方恒沙の諸仏余行を証誠せず、ただ念仏を証誠したもうの文」というのです。仏教の教主釈尊がいままでも、お念仏の功德はなにより大であり、ほかの教えにくらべてもっとも勝れており、極楽浄土に生れるための最勝の行であることを弟子たちに示されており、ここに到っては、ただ単にひとり釈尊のみでなく、あらゆるみ仏がお念仏の価値を讃し、この徳を証明されております。いいかえますと、ほかの教えは讃歎せずに唯一、念仏こそ最善で最勝であることを、すべてのみ仏たちが証明している文が本章であります。

法然上人のご在世当時、念仏のみ教えが全国津々浦々に燎

原の火のように弘まっていきましたが、一方では激しい迫害の嵐が吹きまくりました。聖道門の人はもちろんのこと、念仏門徒のなかにさえ、念仏法門を無視したり、悪口誹謗するものさえできたのであります。ある者は、「念仏することは、牛の吼るがごとく、また犬の鳴くに似ており、これは畜生の念仏である。」とさえ非難したと伝えられますように、さまざまの批判が、称名念仏には加えられたのであります。

このように称名念仏の絶対的な価値が信じられない事情を感じとられた法然上人は、阿弥陀仏の本願は、お釈迦さまが出世された本懐であるということだけを説くのではなくして、六方のあらゆるみ仏たちが証明してその正当性と本来の意義を明確にしていることを、章を立てて説き明かし、いよいよ念仏信仰を確立されたことがうかがい知られるのであります。

まず第一に、善導大師の観念法門を引用して典拠とされています。もとより、阿弥陀經の六方便に説かれている六方便が証誠しているところの經文を引用されるのが至当と思われるが、善導大師によって要領よくまとめられていることと、法然上人自身、善導大師を弥陀の化身と仰いでおられる心情に立たれておられるところから、大師の観念法門を引かれたことと推察されます。

「六方のあらゆる仏国土に、数かぎりないみ仏が在します。みなお釈迦様の教え示された念仏法門の誤りないことを天地に誓って証明されたのであった」

と観念法門には説いています。そして、罪深い一切の凡夫であっても、ただ浄土に往生したいという一心こめて、南無阿弥陀仏を称えれば、みなすべて永遠の生命に生かされることはもちろんのこと、最後臨終に十声一声を称えるものでも、すべて阿弥陀仏が観音勢至などの聖衆とともに親しく来迎して、即座に往生することができると証明されているのです。この六方便の証明は、誰れのためでもない、それは唯凡夫のためであって、私たちが知らず知らずに造れる罪はす

べて滅して往生することができるというのであります。

つぎに、善導大師が、往生礼讃に阿弥陀經の諸仏証誠の文を引用して、一切諸仏護念經、すなわち阿弥陀經を信ずべしと讃勸されているのです。この護念については、

「もし衆生があつて、阿弥陀經の名号を称名すること、もしは七日乃至一日から下は臨終の十声一声一念に至るまで、いずれの場合にも、絶対なる本願力に支持されているのであるから、必ず往生ができるのである。この事実の誤りのないことを諸仏が証明し護り給うから護念經と名づける」としておられます。しかも、弥陀の名号を称えらるると、必ず西方浄土に往生することができるとともに、かの浄土に往きて蓮花が開くとき、妙法、すなわち弥陀の法門を聞くことによつて必ず聖者としての菩薩の願と行とが自然にそなわる尊い身の上となることの事実を証明されているのであります。

さらに善導大師が、觀經疏の散善義において、深心を積まれているなかで、やはり阿弥陀經を引いて、撰論学派たちの非難に対して、念仏行者の心がまえを示されているのであります。

「お釈迦さまが多善根として執持名号を称揚されたのであるから、それだけで充分であるが、疑いぶかい衆生が一仏の所説では真実の信仰を確立することはできないという、十方

の諸仏の慈悲のはからいから、お釈迦さまの証言のあったとき、同心同調の意をあらわすために、各々の国において、虚妄でないことを証明するために、舌相を出してあまねく三千大千世界を覆い、弥陀經所説の念仏法門は眞実語であるということを証明している。」

そして、いかに化仏報仏があらわれても、念仏の法門は虚妄のものであるといわれても、諸仏の証言がある以上には、なんら疑うべきではないと説いているのであります。

三

以上のように、善導大師の注釈書を通じて、阿弥陀經に説かれてゐる念仏こそ間違いなく往生することができるといふ六方証誠の文を味ったのであります。法然上人は、さらにつぎのように私見をのべられておられます。

その第一は「すべて、いずれの行もそれぞれ尊いものにも拘らず、なぜ六方の諸仏は、いずれにも解脱の証言を与えないで、念仏一行にかぎって尊しとするのであろうか」といふ疑問であります。そのことについて上人は、「もし善導のみこころを通してうかがってみると、それはただ、念仏が阿弥陀仏の本願であるということによって、証誠に立たれたので

あって、念仏以外の行は、阿弥陀の本願でないから証誠したまわれなかつたものということが明瞭となつた」と答えておられるのであります。

第二に問題としてのこりますのは、「もし弥陀の本願行であるから証誠されたというのであるならば、阿弥陀經だけでなく、根本の本願を説いた無量壽經や、また本願の念仏で往生したことを明す觀經にも、諸仏の証誠があるべきであるのに、これが示されていないのはなぜであらうか」ということであります。

これについて、上人はつぎのように答えられています。

「その一は、大經や觀經に念仏が示されているが、そのほか余行をも明しているのである。もし念仏に証誠すると、余行をも証誠されるかのごとき混乱がおこる。ところが阿弥陀經は、念仏法門のみが説かれてゐるから、なにごとによらず疑われることがないゆゑに証誠されたのである。二に、大經や觀經に証誠はないとしても、阿弥陀經に見事に証誠されているから、これに準じてほかの二經典をみた場合に、そこに示されている念仏にも証誠があるべきはずである。」

として、天台の十疑論をあげて、大經と觀經にも諸仏証誠の義のあることの証拠としてあげて、この章を終つています。

仏説無量壽經 卷上(第四回)

村瀬 秀雄



一 淨土の人々

設我得_レ仏、国中人天乃至聞_レ有不善

名一者、不_レ取正覚一。

もしわれ仏をえたらんに、国中の人天に乃至不善の名のあることを聞かば、正覚をとらじ。

(意訳) もし私が仏になったならば、淨土にいる人々の中には悪人や不具者といった不善のものがなく、更に不善という言葉すらないようにしたい。もしそうでなかったならば、私は仏にならない。

設我得_レ仏、国中人天壽命無_二能限量、

除_二其本願修短自在一、若不_レ爾者不_レ

取正覚一。

もしわれ仏をえたらんに、国中の人天の壽命はよく限量なからん。その本願ありて修短自在ならんをば除く。もししからずんば正覚をとらじ。

(意訳) もし私が仏になったならば、淨土にいる人々は無限の壽命を保つであらう。ただし他の国の人々を救うという本願をたてて、そこに生れかわるために壽命を短くするものは別である。もし淨土の人々が無限の壽命を得られなかったならば私は仏にならない。

二 觸光柔軟の願

設我得_レ仏、十方無量不可思議諸仏世

界衆生之類蒙_二我光明_一、觸_二其身_一者

身心柔軟超_二過人天_一、若不_レ爾者不_レ

取_二正覺_一。

もしわれ仏をえたらんに、十方無量不可思議の諸仏世界の衆生の類がわが光明を蒙り、その身に触れん者は身心柔軟にして人天に超過せん。もししからずんば正覺をとらじ。

(意訳) もし私が仏になったならば、十方に思ひはかることのできない諸仏の国土が無数にあるが、そこにいる人々が私の光明に照され、その身に浴するならばその者の身心はともに柔らくなり、貪り怒り愚かさの煩惱が消え去り、他の人や天人に較べてはるかに勝れたものとしたい、もしそれができなかつたならば私は仏にならない。

阿弥陀仏の無量の光明は、念仏を唱える者をすべて攝取し給うている。従つてその者は姪貪、財貪の不浄の罪が減せられて清浄の人となり、また怒りの罪が減せられて忍辱の人となり、また愚かさの罪が減せられて智者と同じ人となる。も

しかりに地獄餓鬼畜生等の惡道におちたものが、この光明に浴すれば苦惱が除かれる。念仏を唱える者の素質や環境に係がなく、誰でも念仏を相續することによって臨終に至るまで仏の光明に浴し、慈光に攝取される。このことを仏の不捨の誓約というのである。

三 諸仏称揚の願

設我得_レ仏、十方世界無量諸仏不_三悉

咨嗟称_二我名_一者、不_レ取_二正覺_一。

もしわれ仏をえたらんに、十方世界の無量の諸仏がごとごとくしきして、わが名を称せずんば正覺をとらじ。

(意訳) もし私が仏になったならば、十方世界におられる無量の諸仏のすべてが感嘆して私の名称や国土のことを称讃するようにしたい。もし称讃されなければ私は仏にならない。

すべての仏たちが阿弥陀仏の名号と極楽の莊嚴を称讃してやまない理由は、第一に念仏が万徳の帰するところであり、浄土が完全に嚴飾されているからであり、第二には名号と浄土のことを一人でも多くの人々に知らしめて、誰もが浄土往生を欣求し、念仏を唱えるようにさせたい仏の慈悲の現れからである。

四四 誓 偈

我建二超世願一 必至二無上道一 斯願
不二滿足一 誓不レ成二正覺一 我於二無
量劫一 不下為二大施主一 普濟中諸貧苦上
誓不レ成二正覺 我至レ成二仏道一 名聲
超二十方一 究竟靡レ所レ聞 誓不レ成二
正覺一 離欲深正念 淨慧修梵行 志二
求無上道一 為二諸天人師一 神力演二
大光一 普照二無濟土一 消二除三垢冥一
廣濟二衆厄難一 開二彼智慧眼一 滅二
此昏盲闇一 閉二塞諸惡道一 通二達善
趣門一 功祚成二滿足一 威曜朗二十方一
日月戟三重暉一 天光隱不レ現 為レ衆
開二法藏一 廣施二功德宝一 常於二大

衆中一 說法師子吼 供二養一切仏一
具二足衆徳本一 願慧悉成滿 得レ為二
三界雄一 如二仏無礙智一 通達靡レ不レ
照 願功我慧力 等二此最勝尊一 斯
願若剋果 大千応二感動一 虚空諸天人
當レ雨二珍妙華一

「われは超世の願をたつ。必ず無上道に至らん。この願が満足せずんば誓って正覺を成ぜじ。われは無量劫において大施主となり、あまねくもろもろの貧苦を救わずんば誓って正覺を成ぜじ。われは仏道を成ずるに至らば、名聲十方に超え、究竟して聞ゆる所なくんば誓って正覺を成ぜじ。離欲と深正念と淨慧との修梵行をもつて無上道を志求して、もろもろの天人師とならん。神力大光をのべ、あまねく無際土を照し、三垢のやみを消除して、広くもろもろの厄難をすくい、かの智慧のまなこを開いて、このこんもうの闇を滅し、もろもろの惡道を閉塞して善趣の門に通達せしめ、功祚を満足することを成じて、威曜は十方にほがらかなり。日月は重暉をおさめ、天光もかくれて現ぜず。衆のために法藏を開いて広く功德の宝を施し、常に大衆の中において說法師子吼せ

ん。一切の仏を供養し、もろもろの徳本を具足し、願慧はことごとく成満して三界の雄となることをえん。仏の無礙智のごときは通達して照らし給わずということなし。願わくはわが功慧の力はこの最勝尊に等しからん。この願がもし剋果せば大千はまさに感動すべし、虚空のもろもろの天人はまさに珍妙の華を雨ふらすべし」

（意訳）法藏比丘は四十八願を説き終つてから、更に讃歌によつて重ねて誓つた。

「私は世にならぶもののない本願をたてた。必ずこの上にない悟りを証得し、これらの本願を成就するであらう。もし本願のうち一つでも成就できなかったならば、私は誓つて仏にならない。私は未来永劫にわたつて大施主となり、智慧と能力がともに貧しく、そのために苦んで多くの人々をすべて救うであらう。もし救うことができないれば私は誓つて仏にならない。私が仏になったならば、私の名声はあらゆる世界にゆきわたるであらう。もし私の名声がどこかで聞かれないう所があったとしたならば私は誓つて仏にならない。欲を離れて貪りを断じ、深く禪定を修め、清浄な智慧を求め、こうすることによつて衆生の苦を抜き樂しみを与える行を修めるであらう。このように無上の悟りを求め仏となつて、すべての人々の導師となるであらう。仏の不思議な力によつて放つ

光明を放ち、この光明が際限なく広く一切の世界を照らし、その光明によつて貪りと怒りと愚かさとの闇を消し去つてしまふ。こうして煩惱によつて災難にあつてゐる多くの人々を広く救うであらう。悟りへの智慧の眼を開くことによつて迷妄の闇を除かしめ、地獄餓鬼畜生という惡道に通ずる道を閉じふさぎ、善人の趣くべき所に通ずる道の門を開いて通らせるであらう。このようにたくみに幸いを授けることを成就して、威光を一切の世界に広く明るく輝やかすであらう。そのために太陽や月の光りは私の光明と重ねて照らすことをやめ、自然界の光りはかくれてしまひ現われなからう。私は人々のために仏法の蔵を開いて広く功德の宝を施し、常に大衆の中にあつて説法し獅子吼するであらう。また一切の仏たちを供養し奉り、多くの善根功德を十分にそなへ、本願と智慧とをことごとく成就し、そして全世界の雄者となるであらう。仏たちの智慧は何ものによつても遮えざれることがなく、仏たちの光明はすべてに達してすべてを照し給うてゐる。願わくは私の功德と智慧の力もまた私たちと同じく遮えざれることがなく、光明はすべてを照したいものである。私のたてた四十八願が、もし果しとげられたならば、一切の世界はすべて感動し、虚空の天人は妙なる蓮華をふらせて、本願が成就したことを証明し給え」

五 天地の奇瑞

仏告阿難、法藏比丘説二此頌一已、応レ

時普地六種震動天雨二妙華一以散二其

上二。自然音楽空中讃曰、決定必成二

無上正覚一。於レ是法藏比丘具二足修三

満如レは大願一、誠諦不レ虚超二出世間一

深楽二寂滅一。

仏は阿難に告げたまわく、「法藏比丘がこの頌を説きおわるに、時に応じて普地は六種に震動し、天より妙華をふらして以てその上に散ず。自然の音楽ありて空中に讃じていわく、『決定して必ず無上正覚を成ぜん』と。ここにおいて法藏比丘はかくの如き大願を具足し、修満して誠諦むなしからず。世間を超出して深く寂静をねがえり」

(意訳) 釈尊は阿難にいわれた。「法藏比丘がこの讃歌を説き終ると、まさにその時に大地は六種にゆれ動き、天からは妙なる蓮華がふってきて、比丘の上に散りかかった。自然の音楽が響きわたり、空中に讃嘆する声があって、次のように聞かれた。『汝は必ず無上の悟りを証得し仏となるであらう』

と。このようにして法藏比丘は四十八願をたて終り、修行をつみ、真実の心をもって、世間を超越した悟りの境地を求めたのであった。

六 法藏比丘の修練

建二此願一已、一向専レ志莊二嚴妙土一。

所レ修仏国恢廓广大超勝独妙。建立常

然無衰無変。於二不可思議兆載永劫一、

積二植菩薩無量德行一。

この願をたておわりて、一向に志を専らにして妙土を莊嚴す。修するところの仏国は恢廓广大にして超勝独妙なり。建立常然にして無衰無変なり。不可思議兆載永劫において、菩薩の無量の德行を積植す。

(意訳) 法藏比丘は四十八願をたて終ってから、一意恵心に浄土を莊嚴し続けた。莊嚴された浄土は大きく広く、他の仏国土よりはるかに勝れ、独り妙なるものとなった。外からの影響がないから浄土は永遠に衰えることがなく、変化することのない所となった。法藏比丘は実に長い間にわたって菩薩の徳と行である布施持戒忍辱精進禪定智慧の六つの修行を積み重ねていった。



念佛ひじり三國志

(二)

——法然さゆぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

まず院の御所へ使者を走らせた。後白河上皇の所在を求めた。じきに戻った使者の武者所師清は、昨夜来他出なされていると報告した。

「院までが痴れ者と共謀しておったか」

地団太踏んで口惜しがる信西入道である。

だが、いつもの冷静周到さがあれば、上皇の他出が仁和寺の書院あたりで好きな「今様」に浮かれて夜を徹していたことぐらい容易に推察できたはずである。

「天下第一の愚かな帝でいらっしやる」

信西は罵りながら次の使者を二条帝の御所へ送った。



その日、正確に言えば平治元年（一一五九）の十二月九日であるが、信西入道通憲が取った行動は、不可解とも奇怪とも言わなければならない。天下無双の宏才博覧——当時超トップクラスの知識人とは到底考えられぬ狼狽ぶり、惑乱であった。

朝が明けるとともに信西は、てきばきと手を打った。そこまでは俊敏な政略家の姿だった。

新帝をお連れして参れ、と敝命した。

こちらの使者も空しく戻った。ただし御所で宿直とくいをして、いたわが子の信濃守是憲が同行してきた。

いらだって詰問してくる父を是憲はなだめた。

「理由もなく帝に行幸を仰ぐわけにはまいりませぬ」

「理由はある。敝とした理由があるのだ」

「どんな……」

「痴れ者どもが乱をおこそうとしておる。帝はそのような渦に巻きこまれてはならぬ」

「誰がいつ乱をおこしたのでござりまするか」

「太宰大貳をそそのかして熊野へ追い払った。留守をねらって」

「しかし父上、未だ左馬頭や信頼殿の邸で兵馬の動きは見あたりませぬ」

「伶俐な是憲である。御所から姉小路へ帰ってくる途次で、それらの邸を見まわってきたに違いない。」

「兵馬が動き出してからでは、もう遅いのじゃ」

信西はヒステリックに叫んだ。ふるえる手をあげて、中天を指さした。

「信濃守。そちはわが息子どもの中にあつて最も利発者と信じてきた。それが、これほど自明の理に通ぜんとは」

Ⅱ 前号のあらすじ

世は保元の乱の後の平治元年（一一五九）の春であった。奈良の小禪師と呼ばれた明遍も入位の僧となり、父の信西入道の使を受けて都に帰って来たが、久し振りに会う異母兄の信濃守は是憲の才気は相変わらず鋭い。さて父の用とは明遍に「宋国へ渡れ」という。だが永い雌伏の歳月を経ていま後白河帝を擁して廟堂の実力者となった信西にも世情の繁榮は束の間で、平家一門の六波羅屋敷では新しい動きがあった。それにしても右京大夫邦綱とは何者であろうか。

「何が自明の理なのでございますか」

「あれを見よ」

冬空で鈍い太陽が輝いていた。昨日と同じ平和な光りを都大路に投げかける。

「空に何か……」

「愚か者奴。白虹がああ天日を貫くさまが、そちには見えぬのか」

早曉から父親がくり返し叫んできた言葉だ。しかしかたわらに在る明遍にもその白虹とやらは見えなかった。

「見えませぬ」

兄の是憲はきっぱりと言いつ切った。

「やはり見えぬか……それでは万事休した。わが通憲の一族もこれで終焉じゃ」

がつくりと肩を落すと、信西は愛妻の紀伊ノ二位がいる寝所の方へ去っていった。

「父上は、すっかり逆上なされましたな」

明遍は兄に同意を求めた。

「いや逆上ではない。父上なりに正確な判断はしておられる。白虹天日を貫くとき天下大乱す。この故事を脳裏でくり返し思い描いているうちに、それが白昼夢となつて現前しただけなのだ」

「しかし父上だけにしか見えぬと言うことは……」

「今朝に限ったことではあるまい。保元の乱以来、たえず父上はおびやかされてきたのだ。門閥も財産もなく、頭脳と機略だけでのし上がってきた権謀家共通の恐れと言うものだ」

「せめて武力でもあれば……」

「私が悲しいのは、あれほどの父上がなぜこの最もだいいじな時機に取り乱さねばならぬかと言うことだ。漢籍を広くあさり、叡山で仏法の奥義まできわめた父上ではないか。その刻苦精進が、何一つ役立ってはいない。逆にそれらの龐大な知識が自分を苦しめるだけなのだ」

天下無双の宏才博覧。余りにも豊かな学識が悲劇の相をいっそう深いものにしてている。

と、是憲は言いたげである。

明遍はこの伶俐な兄からもっと詳細に聞いておきたい。いややがてそれを教示される機会にめぐり遇うのであるが、ずっと後のことであった。

現実には、そんな悠長な地点に兄弟を立たせてはおかなかった。目まぐるしく暴走してゆくのである。

再び兄弟たちの前に信西入道は姿を現した。袖に取りすがら愛妻の紀伊ノ二位を引きずるようにして現れたのである。

「妾もおつれ下さいませ」

紀伊ノ二位は泣かんばかりにしていた。

「聞きわけのないことを申すな。そちは院へゆくのだ。どんなことがおこつても上皇さまから離れぬことだ」

「入道殿がいらいしやらなくて、何が出来ましようぞ」

「出来る。そちさえ付き添っておれば、あの愚かな上皇さまもご安泰じゃ。崇徳院さまのようにはならないで済む」

愛妻を説得するために崇徳上皇のことを持ち出した。する父の態度に兄弟たちはちよつと意外な感情をいだか

された。

崇徳上皇は四年前の保元の乱にやぶれ、讃岐へ流されたのである。配所の月の下、上皇の日夜写経に専念した。大乗經典五部を写し終え、二度と政道へ野心を寄せぬという誓状を自らの血でしたためて、関白忠通のもとへ送ってきた。

都への望郷の念やみがたく、せめて東山か西山の寺にまで帰ることを、請願してこられたのである。

この上皇の願いをきびしく拒んで血書写経を讃岐へ突き返した張本人こそ信西入道だったのである。

非情なこの仕打ちに崇徳院は写経を海に投げこみ、いったん出家なされた髪も伸ばしはじめ、蓬髪幽鬼の姿で日夜都を呪い続けているという噂が風に乘って流れてきている昨今であった。

「師光、馬を引け」

紀伊ノ二位を突き放した信西入道は叫んだ。左衛門尉師光は走り去る。これから何処へ走ろうとするのか。

さらに信西は三人の家臣の名を呼び上げた。右衛門尉成景、武者所師清、修理進清実。そして、

「小禅師」

と明遍をかえりみた。

「はい」

「そちは馬に乗れるか」

「富小路の旧邸におりましたところは」

出家する前にたしなんだことを告げた。

「よし、信濃守ともどもについて参れ。きつい早駆けぞ」
やがて庭前に六頭の馬が用意された。舎人の成沢が口取りにくると、

「わしはいい。小禅師を助けてやれ」

と命じた。

「どちらへいらっしゃいますか」

紀伊ノ二位が訊いた。

「奈良じゃ。当分は小禅師がいる東南院の坊にでも身をかくして、世を忍ぶことにする」

信西入道は明るく叫んで、師光が引いてきた月毛にうちまたがった。明遍も真似てみたが、危うくずり落ちそうになるところを、舎人の成沢に押し上げてもらった。

二

都大路はもの静かなただずまいであった。駆け抜けてゆく八騎を凝視する眼はない。源義朝の配下、東国の武

士らしい姿とも行き遇わなかった。未だ動乱の日は幕明けしていないのである。

都から奈良へは二筋の道があった。木津川の堤添いに行く道と、平等院のところで宇治橋を渡りそのまま山溪を縫う道だ。信西入道は後者を進んだ。

大峰山の麓で近江路へうねってゆく宇治川と別れる。そこから奈良との国境には重厚な山塊が二群三群とつらなる。田原の里はそんな山塊のふところに抱きかかえられていた。

信西はこの山里の奥にある大道寺という荒れ寺まで来て駒を休めた。

「わしらは此処でしばらく休むことにする。お前らは都へ戻って様子を見てくるのだ」

右衛尉成景と舎人の成沢に命じた。彼らは馬を都へ引き戻していった。

本尊薬師如来の前に信西入道は端座した。じっと瞑目して、もの想いにふけた。誰も言葉を発しなかった。昨夜から一睡もとらなかった明遍はさすがに疲れて、内陣の柱にもたれて眠りこんだ。

ふと眼をさましたとき、父信西の語る声が遠い汐騒のように流れてきた。兄の是憲や師光らに語り聞かせてい

る。どうやら現状の政治的分析であった。本堂の外景はすでに深い暮色だった。

「左馬頭（義朝）や信頼はこの信西を憎悪しきっている。だからと言って彼らはただちに手を下すことはできぬ。わしの背後には六波羅の太宰大貳（清盛）がいるからだ。平氏の武力がある。直接行動は、わしの背後からその支柱が除去されたときにおこる。四位ノ右京大夫（邦綱）はその機微を知りつくしていた。もちろん彼のことだ。直接には動かなかったであろう。娘が乳人をしている帝（二条天皇）その側近にいる新大納言（経宗）や別当惟方らを教唆した、とわしは見る。均衡は突如として崩れたのだ。太宰大貳が都から姿を消した。この信西を一挙に滅してしまおうためにな」

そこで左衛門尉師光が言葉をさしはさんだ。

「殿とあれほど肝胆あい照らした清盛殿が、なぜこの期に及んで突如裏切ったのでしょうか」

「清盛が……か。それは師光。彼とても廟堂で覇をとなえたかろうが。田舎武士奴が、わしの袖にすがって昇殿してきたわけじゃが、現在ではこの信西が目ざわりでなんのよ。学殖はなし、政治の識見でも雲泥の差がある。この信西さえ除けば意のままになると浅墓にも考え

＜信西、大凶の木星を見て即身成仏するの図＞



たのじゃ」

「まことに清盛殿は浅墓なお人」

信西入道はそこで口をつぐんだ。座を立つと、廻廊まで出ていった。じっと暮れなずむ山里の空を見上げている。

「父上は、何を見ておるのでしょうか」

明遍は兄是憲にささやいた。

「星じゃよ。星の現れかたを待っていないさる」

「またしても白虹ですか」

「小禅師、あの父上が哀れとは思わぬか」

「……」

姉小路の邸にいたときもこの兄は同じ風懷を洩らしたものだ。

「天下の第一の知識人が、星の出方一つでおのれの運命を見定めようとしておる」

「それは父上にだけ限ったことではありませんまい。みんな吉凶の星で」

「うむ。だがそれが哀れだと申すのだ。そんな呪術に頼らずに人間は生きられぬものなのか」

「呪術に頼らずに——」

兄弟の会話は此処で途切れた。夕景の空を凝視してい

た父の信西が叫び出したからである。

「出たぞ、大凶の木星がついに現れたぞ。師光、馬だ」

またしても星の呪術が命ずるままに行動をおこそうとする。

「大凶の木星とは何でしょうか」

明遍の問いに兄の是憲は明快に答えてくれた。

「木星寿命承にあり、大伯經典を侵すときは、臣君に変わり奉る……つまり逆臣が天下を取るといふ故事だな。父上にとっては絶望の星ということになる」

そんな是憲の説明を裏付けるように、信西は師光の引いた馬に跳び飛ると、大道寺の境内を走り出ていった。みんなはあわててそれを追った。

石堂山を越えて、信楽の里へ抜ける山峡へ駆け入った。ちょっとした山頂まで来ると、信西は馬から降りて、もの狂ったように叫んだ。

「師光、穴を掘れ」

「穴を……何の穴でございますか」

「言わずと知れたことよ。信西の墓を作るのじゃ」

「殿の墓を」

「さよう。わしはその墓穴で即身成仏をする。死ぬ場所は此処にしかないのだ」

「奈良へいって再起を謀るご計画を放棄なされるのですか」

「再起を謀るんじゃないと。師光、愚かなことを申すな。天なるかな命なるかなじゃ。そんな真似をして何になるか」

信西の口もとにはぶ気味な笑みが描かれていた。その眼は中天の一角を凝視して動かなかった。絶望の木星が、そこでまたたいているのであろう。ただし明遍には、宵の空をちりばめた星群のなかで、それがどの星であるかは判らなかった。

信西入道の身体がすっぱりとはいれるだけの穴が掘られたころであった。馬の蹄音が登ってきた。

「殿、此方でございますか」

右衛門尉成景の声だった。

「都の様子は、どうであったか」

「はい。院の御所に火がかけられました」

「やっぱり」

「それから姉小路のお邸にも頭の殿（義朝）の軍勢が押し入って、焼き払おうとしております」

「それ見たことか」

にんまりと信西は微笑むと、従者に作らせた竹筒を手

にして、穴の中へ身を沈めていった。

「さあ、みんなして土をかけよ。この穴を信西もろともに埋めこんでしまふのじゃ」

「殿、お願いでございます」

師光が悲痛な声を発した。

「何じゃ」

「手前ども聖なる殿のお最後を見届けるにあたって出家致したく、法名を賜わりたく存じます」

「法名をか」

自らの手で、掘り返した土を掻き寄せて、首だけを地上にさらす姿になりながら、信西はぐるり従者たちを見まわした。

「よろしい。師光、お前は西光じゃ。成景は西景。師清は西清。そして清実、西実じゃ」

信西の西の字をそれぞれに与えたのであった。

信西の眼は、このあと痛ましげに立ちつくしているわが子に慈しむように向けられた。

「信濃守。そちも出家せい。事態がかく成った今、そちとても安閑として殿上におけるわけにはまいらぬ。必ず追究されるぞ」

「判っております」

「そちにも法名をさずける」

一瞬考えこんでいたが、信西はやがてぼつんと呟いた。

「円照……円照がいいな」

「円照、ですか」

「この父のようにけわしい道を歩いてはならぬ。おだやかに、円く生きるのだ。円照じゃ。そして遊蓮……遊蓮房と号したのが良からう。遊蓮房円照じゃ」

信濃守は、この新しい法名を素直に受容した。父に向って静かに頭を下げた。

このあと信西はいらだたしげに命じて、おのれの首を土の底に埋めこませた。やがて、信西がくわえた竹筒の先だけが地表に残った。

動乱の平治元年、十二月九日における信西入道通憲のあわただしくも奇怪な行動は、木幡峠の土中へもぐりこむ即身往生の儀ですべてを終えたのであった。その子らや従者たちは、奈良や近江の里へそれぞれに落ちていった。

＜信西が首獄門にさらされる図＞



こに獄門台がしつらえられて、一つの白髪首がさらされていたからである。

一代の権力者信西入道通憲の首であった。

田原村の山奥、木幡峠の土中で即身往生したはずの信西だったが、どうやら未だ息があるうちに追手によって発見されたらしい。

右衛門尉西景ともどもに都へ様子を見に戻った舎人の成沢が出雲前司光泰という武士に気づかれてしまった。光泰は田原村へ帰ってゆく成沢を尾行したのだ。

村の入口で西景にゆき遇った成沢は信西入道の所在を尋ねた。是非報告しておかねばならぬことがあった。

それは火をかけられた院の御所。後白河上皇は危うく身一つでお逃げになったが、その牛車の隅に紀伊ノ二位は身をひそめることが許された。無事に仁和寺へ脱出できた旨を夫の信西に報告して欲しいという依頼であった。

成沢は木幡峠まできた。そこで竹筒をくわえて土中にある信西へ報告をはじめたとき、光泰らの五十騎が彼を取りかこんだ。成沢はその場で斬られ、土中の信西入道は掘り出された。斬られた首は都へ持ち帰られ、いまこうして都人の前にさらされているのである。

—新刊—

〈中国古典新書〉

『茶 經』

付 喫茶養生記

林 左馬衛 共著
安居 香山

定価 1300円

発行所

(株) 明德出版社

東京都千代田区内神田 1-5-7

TEL (03) 293-0827

振替東京 58634

「やっぱり酬いが来たというものであろう」
採烏帽子もみかぼうしの老人がしたり顔で周囲の群衆たちに説明している。

「この入道はな、去る保元の乱の折、すでに大和の般若野へ埋葬された悪左府(頼長)さまの死骸を掘りおこし、首を斬って都大路へさらした主謀者じゃ。四年前の因果がめぐり来たって、今はおのれがさらされておる」

群衆たちは何度もうなずきながら老人の話に耳を傾けている。

下民ながら老人は政情に通じた男と見え、さらに悪左府頼長と信西入道の古い話にまでさかのぼって語るのである。

二人はもと師弟関係にあった。好学の若い公達のために信西はその含著を傾けて教えこんだ。頼長も利発で、一を聞いて十を知った。お互いが当代並ぶ者なき大知識人に成長したところで、血で血を洗う保元の乱に発展したというのである。

「なまじ此処がすぐれておると、こうして身を滅すものじゃ」

と、採烏帽子の老人は庶民たちに教訓している。

群衆に立ちまじって老人の話に耳を傾けていた二人連れの法師は、どちらからともなく人垣を抜けていった。

「うまいことを申す老人だ」

「それにしても父上は……」

若い法師の方は涙ぐんでいる。

「小禅師、もう言うな。このように苛酷な人生があるから仏法は存在しているのだ」

東南院の明遍と信濃守是憲。いや今は出家して遊蓮房円照と名を改めた兄弟たちであった。

いったん奈良へ落ちのびたが、都の様子をさぐるべく二人は今朝潜入してきたのである。

あれから六日間がすぎていた。信頼と義朝が政権を握った現在、信西入道の子供たちにもきびしい探索の眼が

光っている。僧俗十二名の罪も決定していた。

さすがに死一等は減ぜられたが、新宰相の俊憲は出雲国へ、播磨中将成憲は下野国、右中弁貞憲は隠岐国。美濃少将長憲は阿波国。法眼の静憲は丹波国。澄憲は信濃国。そして是憲は安房国へ、小禅師の明遍までもが越後国へ流罪が決定していたのである。

「それで兄上は、これからどうなされますか」

人けが乏しくなった大宮通りを往きながら明遍はたずねた。お互いに名乗り出て、流罪に服そうなどという気はさらさらなかった。

「わしは善峰に身をかくすつもりだ」

「善峰というと西山の広谷」

「うむ。善峰寺には慧心流の念仏者たちが数多くいると聞く。そこで念仏を学びたいと考えている。小禅師はどうするか」

「私は……」

じつは何処と言って行くあてはなかった。一度戻った東大寺の東南院だったが、そこは官度の寺院であって、当然司直の手が伸びてくる。現にその危険を察して今朝脱出してきたのだった。

「お前も善峰へゆくか」

「いや、私はちょっと母上のところへ顔を出してきたいと思います」

「覚（さとる）のお局にか」

明遍の生母覚（さとる）御前は、四条に近い綾小路に住んでいた。そこも危険なはずだったが、とにかく訪ねるだけは訪ねて、そのあと身の振り方をきめたかった。

「では兄上」

「また何処ぞでめぐり遇うこともあろう」

兄弟は六角堂の近くにまできて道を左右に別れた。

烏丸通へ出たとき明遍は美々しい行列とゆき遇った。黒塗りの牛車をとりかこんで数十名の侍どもが往く。

立ちどまって見送る行人が呟いた。

「右衛門督さまだ」

一夜のクーデターで政權を握った若き公達藤原信頼。丁度明遍の前へさしかかったとき、牛車の小窓をひらいて、束帯姿の白い顔が覗いた。

明遍は見抜かれたかと首筋に冷めたものを感じた。もちろん信頼は政敵信西の息子とは言え奈良の小禅師の顔なぞに見おぼえはない。新しい権力者として、路傍に立つ下民たちへ豊かな笑顔を投げかけていた。



完成間近い新大股

〈写真①〉

徳川家康増上寺本堂造営年次考

現在芝増上寺の新本堂の造営工事が着々と進められ、今年の十一月にはその偉容が完成する予定である。東都の浄土宗寺院の殿堂として皆注目するところである。(写真1)

周知の如く増上寺は徳川家康の庇護により江戸初期に浄土宗を代表する寺院に発展した。例えば家康は増上寺に千石の寺領を寄進して経済基盤を確立し、本堂・山門・経蔵などの諸堂宇を造営して寺内を整え、更に宋・元・高麗版の大蔵經を寄進して増上寺の学問興隆をはかるなど種々の力を尽している。今回は新本堂の完成を間近に控え、家康の増上寺本堂の造営年時について、最近発見された新史料の紹介がたがた少しく愚見を述べてみたい。

従来、増上寺本堂は観智国師存応が家康の助力により慶長十年(一六〇五)に造営したものと考えられてきた。これは『三縁山志』の説が踏襲されてきたものであり、決定的な史料の裏付はなかった。

それが最近発見された新史料(写真2・3)により、家康の増上寺本堂の造営年時が明確になるとともに、従来の慶長十年説を訂正する必要が生じてきた。(なお、この新史料は慶応大学助教授高橋正彦氏の紹介されたものである。私と史料の年代推定にやや相違があるが、高橋氏の力によるところが大きい。)

写真2・3は江戸幕府の大工頭中井家に伝わる文書の一部である。当時の中井家の当主は大和守正清といい、家康のもとで棟梁のリーダーとして幕府の造営事業の責任者をつとめた人物である。増上寺の諸堂造営は幕府の力によって行われたものであり、増上寺造営の事業報告が幕府の命じた増上寺普請奉行内藤忠清と大工頭中井正清との間で往復している。これらの一連の文書の中に増上寺本堂の柱立の日時や、完成年時を示すものがある。従来の増上寺本堂の造営年時は後世に作成された『三縁山志』などの史料によって考えられてきたが、今回発見された新史料は当時の工事関係者の間を往復した書状の中に見られるのもであり、非常に信頼できるものである。

写真2は普請奉行内藤忠清から大工頭中井正清に増上寺の造営の進行度合を報告したものである。この書状の細かな年代考証は別の機会にしたいと思っているが、内藤忠清が慶長十三年迄丹波篠山の築城工事にあたっていること、更に同十四年に増上寺の材木を集めていることなどから、私は慶長十四年のものと考えている。この書状中に「増上寺本堂も去廿六日吉日之由にて柱立仕られ候、唯今紅梁あけ申候、」とあり、私の推定が許されるならば増上寺の本堂の造営工事は慶長十四年十月廿六日に柱立が行われ、十一月十三日頃紅梁が

あげられたことになる。

写真3は同じく内藤忠清から中井正清に出された書状であるが、書中に「然者増上寺御普請、源右・又右・作右（棟梁名前）精を入らるについて早々出来申候」、「大御所様（家康）御上洛について」、「国師様（増上寺住持存応）御気にも一段入申候て」とあり、この書状は増上寺本堂の完成を報告しているものであることがわかる。書状の年時は書かれていないが家康が四月頃京都に上洛しているのは慶長十一年と同十六年だけであり、更に書中に存応が国師と呼ばれていることを合せて考えるとこの書状は慶長十六年四月のものであることがわかる。なぜならば存応が国師号を勅許されたのが、慶長十五年七月のことであり、十一年ということはない。これをみると増上寺本堂は慶長十六年四月に完成していたことがわかる。

従来、増上寺本堂は慶長十年に完成したと考えられてきたが、新たに発見された中井家文書によれば、工事開始は慶長十四年十月廿六日であり、完成したのは同十六年四月のことであることがわかる。四百年近くうずもれていたこれらの史料が昨今発見されたということは、現在増上寺新本堂の完成近きを見るにつけ、これもなにかの因縁と、思いを新たに紹介してみた次第である。

（宇高良哲）

内藤忠清書状(写真②)

内藤忠清書状(写真②)の複製。右側に「浄土」とあり、左側に「昭和十年五月二日」とある。手紙の本文は、昭和十年五月二日に、東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六に、法然上人鑑仰会に、電話東京二六二局五九四四番、電話東京八二一八七番に、手紙を送る。手紙の本文は、昭和十年五月二日に、東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六に、法然上人鑑仰会に、電話東京二六二局五九四四番、電話東京八二一八七番に、手紙を送る。手紙の本文は、昭和十年五月二日に、東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六に、法然上人鑑仰会に、電話東京二六二局五九四四番、電話東京八二一八七番に、手紙を送る。

内藤忠清書状(写真③)

内藤忠清書状(写真③)の複製。右側に「浄土」とあり、左側に「昭和十年五月二日」とある。手紙の本文は、昭和十年五月二日に、東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六に、法然上人鑑仰会に、電話東京二六二局五九四四番、電話東京八二一八七番に、手紙を送る。手紙の本文は、昭和十年五月二日に、東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六に、法然上人鑑仰会に、電話東京二六二局五九四四番、電話東京八二一八七番に、手紙を送る。手紙の本文は、昭和十年五月二日に、東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六に、法然上人鑑仰会に、電話東京二六二局五九四四番、電話東京八二一八七番に、手紙を送る。

「浄土」購読規定

一部 定価 百三十円

(送料十二円)

会費一カ年金一、五〇〇円

(送料不要)

浄土 六月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十九年五月二十五日 印刷

昭和四十九年六月一日 発行

定価 百三十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑑仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

弊会発行の恒例教化トラクト

『お ぼ ん』

新書判・表紙共 12 頁

定価 一部 18 円 (200 部以上 16 円)

送料・実費

“おぼん・せがき会の施本に好適です”

諸経費高騰の折から、今般価格は多少値上げさせて頂きました。
お早めにご注文を頂けますれば幸甚です。

浄土宗開宗八百年記念トラクト

『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価 180 円 (〒 70円)

(200部以上 単価160 円 送料実費)

内 容

第一編 法然上人のあゆみ

第二編 浄土宗のおしえ

第三編 信徒の心得

附 法然上人略年譜・参考文献

開宗八百年の聖辰を迎えました。本会ではこの慶祝を期しトラクトを作成いたしました。檀信徒用施本・慶讃法要記念品などとして広くご利用下さい。

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番